

潁原退藏著作集

第九卷

潁原退藏著作集

第九卷

額原退藏著作集 第九卷

定価 一九〇〇円

昭和五十四年四月一日印刷
昭和五十四年四月十日発行

著 者 額 原 退 藏

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 田 博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一八―七
電話(五六一)五九二一―九

振替東京二一三四

©一九七九 検印廃止

目次

芭蕉講話

五

一 一筋の道 二 江戸の春 三 芭蕉庵 四 野ざらし紀行

五 笈の小文 六 奥の細道 七 幻住庵と落柿舎 八 寂・

栗と軽み 九 終焉

蕉風の展開

一四

一 序説 二 総説

芭蕉

三六

一 家 二 亡命 三 上京と『貝おほひ』 四 東下 五 芭

蕉庵 六 旅 七 閉関 八 終の旅

市 隠——芭蕉の人間的系譜

三〇〇

芭蕉の旅と風雅——俳諧の伝統

三〇七

芭蕉年譜

三三

芭蕉研究書目

三四

後記

三七

芭蕉一

芭蕉講話

一 一筋の道

伊賀盆地^{いがぼんち}の北部に位して、服部川^{はつとりがは}の緩やかな流を見下す小高い丘の上に、物静かな上野^{うへの}の城下町がある。夕日はもうお城の松の向うに沈んで、あたりはいつか暗くなりかけて居た。その頃町の東北にある赤坂といふ坂路につゞいた通りを、一人の少年がゆつくりと歩いて来た。それは当時金作^{きんさく}と呼ばれた芭蕉の姿であつた。何か考へごとでもあるやうに、彼の眼はじつと下を向いて居た。けれどもその眼ざしは憂はしい色を帯びて居るのではない。むしろ生き生きと喜びに輝いて居るのだ。そして立派な門構へこそはないが、さすがに町家とはちがつた気品のある小ぢんまりした家の前に近づくと、急いでその中へ走りこんで行つた。

金作は一体何を考へながら歩いて居たのであらう。彼はその頃領主藤堂家^{とうだう}の一族である藤堂新七郎家の若君に仕へて居た。新七郎家の当主良精^{よしきよ}は、知行五千石を頂く侍大将で、上野の城代藤堂采女家^{うねめ}に次ぐ高い家柄であつた。若君といふのは良精の三男であるが、二人の兄がどちらも早くなくなつたので、当然その家を嗣がねばならぬ地位にあつたのである。即ち大事な若主人であつた。名を良忠^{よしただ}といふ。父

君良精はこの大事な若殿の為に御側づきとして本当によい御相手となるやうな子供たちを選んでやつた。金作はその選ばれた一人である。金作のお父さんは松尾与左衛門といつてもとは相當な武士の家筋から出たのであるが、お父さんの頃は家運も衰へて居たらしい。お父さんが何をして居たかはつきり分らないが、手習師匠をして居たとも伝へられるから、家は勿論富んで居たとは思はれない。金作はその次男に生まれた。兄を半左衛門といふ。――近頃の研究では、もう一人又右衛門といふ兄があつたとも言はれる。すると金作は三男であつたわけである（〔編者註 これは菊山当年男氏の説によつたものだが、その後発見された遺稿曰く、養子に直した末妹およしの婿とする説もあるが、いずれにせよ。〕）。――外に姉が一人、妹が三人あつた。兄半左衛門もやはり藤堂家の一族藤堂主殿長基（〔編者註 正しくは藤堂修理長基〕）に仕へたが、これとてもごく小身な武士の身分といふにすぎなかつた。しかし五千石の若殿の御側づきに選ばれた金作である。家は小身微禄であつたにしても、金作は幼い時から人目につくだけのすぐれた素質をもつて居たにちがひない。それはたゞ伶俐（りかう）さうな子供だといふだけではない。どんな事にも純な誠実さをもつて接してゆくといふ美しい心が、誰にもすぐ感ぜられたのであつた。

良忠は金作より二つ年上であつた。金作が良忠の御側に出仕したのは十歳前後の頃の事らしいから、最初はほんの遊び相手を勤めたにすぎなかつたであらう。しかし二人とも段々大きくなるに従つて、所謂学友としても金作は立派に勤めを果たした事と思はれる。元来良忠の父君良精は、武人ながらも文学の嗜みがあり、折にふれては和歌をよんだり漢詩を作つたりした。良忠もさうした感化を受けたのであらうか、やはり少年の頃から何か文芸といふものに特別の親しみを感じて居た。そしてその頃新しく興つた文芸として民間にまで汎く行はれるやうになつた俳諧に対して、いつか強い興味をもち始めて居たの

である。当時の古い俳書を見ると、伊賀にも幾人かの相当名を知られた俳人たちが居た。それらの俳人たちの影響もきつとあつたのだらうが、やがて良忠は京都の俳諧宗匠として名高い北村季吟^{きぎん}を先生として、俳諧の道に志すことになつた。俳号を蟬吟^{せみぎん}と言つたのも、季吟の一字を分けて貰つたのであらう。さてこの若い主君蟬吟の俳諧のお相手として、最も御氣に入つたのは実に少年金作だつたのである。もともと金作の忠実な奉仕と濃やかな愛情とは、良忠の心にも深く感ぜられて居たであらう。それに金作はまた文芸の天分にも豊かに恵まれて居た。蟬吟がこの金作を特に愛したのは尤もなことである。伊賀の竹人^{たけひと}といふ人の書いた芭蕉の伝記にも、「愛寵^{あいきゆう}頗る他に異なり」と伝へて居る。もとより封建時代の厳しい主従関係はあつたらうが、それでもかうした蟬吟と金作との間柄は、本当に親しい友情でむすびつけられて居たにちがひない。

金作が考へ深い眼を、明るい喜びに輝かせながら我が家へ歸つたのは、その日若殿から初めて俳諧といふものの面白さを聞いたからであつた。今まで和歌や連歌といふ文芸がある事は、金作も知つて居た。それに俳諧の話も全く聞かないのではない。しかしその俳諧がどんな風に和歌や連歌とちがひ、またどうしてあんなに人々が俳諧を面白がるのかは、一向分らないのであつた。若殿もこの頃は蟬吟などいふ号をつけて、時々俳諧をやつて居られるらしい。今日は金作もそのお相手を仰せつかつたのである。俳諧といふのは五七五の句と七七の句と交互につゞけて行くので、形からいへば連歌と少しもちがはない。けれども連歌は和歌と同じやうに、上品な雅語の外は用ゐないのに反して、俳諧は日常民間などで使つて居る俗語を、必ず一句の中によみ込まねばならない。さうした俗語を和歌・連歌の用語に対して俳言^{はいごん}と称した。だから俳諧とは、言はば一句毎に俳言をよみこんだ連歌だとも考へられる。しかもこの

俳言——即ち俗語を自由自在によりこむといふ事が、何よりも大きな魅力を俳諧にもたせたのである。俗語を盛んに用ゐるといふ事は、結局自分たちの周囲に日常経験する新しい事物を、そのまゝ文芸の題材に取入れるといふ事であつた。一人は誰でも新しい試みはやつて見たいものである。特に江戸時代には今までに比べると、民間の文化が遙かに進んで来たので、目新しい事物も何かと多くなつて居る。それを一寸文芸の中に入れて見たいとは、誰しも自然に思ひつくことであらう。けれども和歌や連歌では、さうした新しい事物や、それに關聯した通俗な言葉などは、卑しいものとしてこれをよみ込む事が許されなかつた。そこへ俳諧はその俗な事物や言葉をいくらでもよんで宜いといふのである。いや俳諧といふ以上は、ぜひ俗語をよみこんだものでなければならぬのである。さういふ俳諧が、特に進取的な若い人たちに喜ばれるのは当然であつた。

今日金作は若殿から、いろ／＼面白い俳諧の御手本を教へて頂いた。一体俳諧はもと連歌の言はば余興として起つたものである。連歌は大がいに百韻ひゃくうんと言つて、五七五と七七の句を交互に百句連ねるのが普通で、さういふ長い連歌をやつたあとなどで、何か滑稽なことを俗語まじりの五七五や七七に作つて、みんなでわつと笑ふといふやうなものであつた。だから連歌のやうに長く続けることもなく、大ていは五七五に七七を附けるか、七七に五七五を附けるか、二句きりの短いものである。又連歌では発句といつて百韻の一番最初の五七五の句だけ、一句独立に作ることもあつた。それで俳諧でも同じ滑稽な発句をよむ事も行はれた。だが要するに俳諧は連歌の余興である。室町時代にも、宗鑑そうかんとか守武もりたけなどといふ熱心な俳諧の作者も居たが、多くは一時の言捨いごすてにすぎなかつた。ところが江戸時代に入つて民間の新しい文化が進むと共に、この俗語を用ゐた一種の滑稽文学が急に盛んになつて来た。さうして松永貞徳と

いふ人を中心にして、大勢の門人たちも出来た。江戸時代になつて最初に出了た『犬子集』といふ俳書には、もう一七七人に達する作者の名が見える。その頃の俳人は貞徳門下の人々が主であつたので、貞徳時代と呼ばれて居る。蟬吟や金作が俳諧に興味をもち始めたのは、つまりこの貞徳時代の事なのである。貞徳は和歌や連歌の心得も深く、俳諧についても真面目な考をもつては居たが、もともと滑稽を主とした遊戯文学ともいふべき俳諧の事である。文芸としては決してまだ立派なものではなかつた。金作が今日若殿から示されたお手本の一つ二つは、

しをるゝは何かあんずの花の色

貞徳

冬籠り虫けらまでも穴かしこ

同上

といった作であつた。第一句は杏子の花が萎れて居るのは、何を思案し心配して居るのだらうといふので、杏子と案ずとの言掛がこの句の面白みの中心である。しかも杏子も案ずも所謂俳言であつて、和歌や連歌には用ゐられない言葉であつた。さういふ通俗語で言掛をするといふところに、人々は新しい興味を感じたのである。第二句も虫までが冬になると穴の中に籠るといふのを、あなかしこ謹んで引籠る事とに言掛け、なほ虫けらなどといふ俗語を用ゐた所が喜ばれたのである。今日から見れば、これが堂々たる貞徳先生の作かと怪しまれる程幼稚なものであるが、当時としてはこの程度の俗語を用ゐて一種の洒落を言ふ事にも、非常に新鮮な現実味が感ぜられたのであらう。金作もまた今まで文芸の用語などにはならないと思つて居た俗語が、かうして面白い言廻しに用ゐられる事を知つて、何かしら新しい文芸の世界をのぞき見たやうな気がした。そして今藤堂家から非番で我が家へ帰る途中にも、その事を考へながら歩いて居たのであつた。

伊賀で古くから伝へられた話によると、芭蕉は十四歳の時「犬と猿の世の中よかれ酉の年」といふ俳諧の発句をよんだといふ。芭蕉が十四歳の年に当るのは明暦三年で、その年が酉であつた。俗に「犬と猿のやう」と言はれる程、犬と猿とは仲が悪いものである。酉の年の前は申、後は戌の年になるので、丁度酉の年が両方の仲を取持つて、仲がよいやうに世の中もよくあれかしと祝つた作である。「犬と猿」といふ俗諺を用ゐ、仲がよいと世の中がよいと、両方の意をきかせたのがこの句の面白いところである。尤もこの句はたゞ口に言ひ伝へられた話であるから、確に芭蕉が十四歳の時の作であるかどうかはきめられない。しかし天分に豊かであつた芭蕉としては、十四歳でこのくらゐの句を作る事は当然あり得たであらう。金作が若殿から俳諧の話を聞いて歸つたといふのも、実はさうした事実もあつたらうかと想像してかいたのであるが、とにかく芭蕉が蟬吟のお相手として俳諧を嗜むやうになつたのは、藤堂家へ出仕して後間もなくの事であつたと思はれる。しかし固より少年時代の作である。いくら芭蕉が天分にすぐれた子供で、又非常に熱心であつたとしても、それが当時の俳書などに一々書きとめられよう筈もない。現在古い俳書の上で、確に芭蕉の作として記されて居る最初のものは、寛文四年に貞徳の門人松江重頼といふ人の編纂した『佐夜中山集』に見える次の二句である。

姥桜うばざくら 咲くや老後の思ひ出

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿

寛文四年といへば芭蕉が二十一歳の時である。その頃少年金作はもう元服して、通称を甚七郎、又忠右衛門、名を宗房と呼んで居た。右の二句も松尾宗房の名で出て居るのである。句の第一は彼岸桜の一種に姥桜——花の咲く間葉が出ないので、葉無しを齒無しにもちつてつけた名であるといふ——といふ

があるので、その名に因んで、姥だから老後の思ひ出に花を咲かせたと面白く言つたのである。第二句は謡曲の鞍馬くらま天狗てんぐに、「花ぞしるべこなたへ入らせ給へや」とある文句をとつて、その花を月にかへ、給べと旅とを言掛けた趣向で出来て居る。句の意は月が宿へ導く案内者だ。その月も出たから、どうぞこちらへ入らつしやつてお泊り下さいといふのであるが、一句の面白みは当時の人々に親しかつた謡曲の文句を、うまく取入れて作つたところにある。和歌や連歌だと、万葉集だとか古今集だとか源氏物語だとか、そんな古い和歌や物語を典故として作る。俳諧はもつと通俗的な謡曲を盛んに用ゐる。姥桜などといふ通俗な名をもつた桜も、今まで和歌や連歌では題材とされなかつたものである。

芭蕉の俳諧として知られる最初の作品は、このやうなむしろ幼稚なものにすぎなかつた。今日の少年少女たちは、恐らくこんな句には一向感心しないであらう。「何だ、つまらない駄洒落ではないか」と言ふにきまつて居る。全くその通りだ。けれども当時——即ち貞門時代に一番偉いと言はれた貞徳自身の作ですら、前にあげたやうな杏子と案ず、あな畏かしこと穴あなかしことの言掛を主にしたやうなつまらないものであつた。又実際貞徳やその門下の人々にしても、かうした俳諧を和歌や連歌のやうな高級な文芸とは考へて居なかつたのである。もともと俳諧は連歌の余興で、ほんの一時の笑をとるものにすぎなかつた。貞徳は俳諧もつまりは和歌の一体で、俳諧を稽古する事から自然和歌や連歌の道に通ずる事になるものだといつて、そこに文芸としての勿体もったいをつけて導いたのではあるが、所詮俳諧は和歌・連歌よりも低い文芸だと考へられて居た。では人々は何故そんな自分でも低級と考へる俳諧を、和歌や連歌よりも一層熱心に作つたのであらうか。それは前にも一寸述べた通り、俳諧が通俗卑近な新しい事物や言葉を、自由によりこむ事が出来るといふ点が、何よりも強い魅力となつたのである。それだと更に第二の疑問

が起るであらう。では何故高級な文芸と見られる和歌や連歌に、そのやうな新しい事物や言葉をよみこむ事をしなかつたのであらうと。それは誠に尤もな疑問であるが、実は江戸初期の和歌や連歌といふものは、あまりに型にはまつた形式のみを尊重した結果、用語にせよ題材にせよ、一切新奇なものなど取入れることが出来なかつたのである。極端に言へば、和歌とはかういふ題材を、かういふ言葉でよむものだときめられて居るやうなものであつた。連歌にしてもむつかしい規則がいくらもあつて、少しでもそれに背くといけないとされて居る。言はばそこには新しい進取的な精神が全く欠けて居たのである。

だからたとひ俳諧は連歌の余興として起つたにせよ、又縁語や掛詞の滑稽を主とした低い文芸であつたにせよ、新しい現実の生活から題材や言葉を選び得るといふ事は、確に大きな魅力となつたにちがひない。特に当時の型にはまつたやうな和歌や連歌に満足しないで、もう一步文芸の世界を時代に沿うて前進させようと考へて居た人たちにとつては、俳諧こそまづその足がかりとなるべきものであつた。

蟬吟の周圍にあつて、俳諧のお相手をしたものは、芭蕉の外にもなほ二、三人の人々が居た。だが中でも最も熱心なお相手が、芭蕉の宗房であつたことは言ふまでもない。折々京都の季吟宗匠へ添削を乞ひに行く使なども、多くは宗房が御用を承つた事であつたらう。あの『佐夜中山集』に宗房の発句が見えた翌寛文五年の冬には、蟬吟が自ら主催して貞徳の十三回忌追善の俳諧を催した。

野は雪に枯るれど枯れぬ紫苑哉

蟬吟

鷹の餌乞ひと音をばなき跡

季吟

〔註〕 蟬吟の発句は紫苑に師恩を言掛けて、貞徳の死後もなほ師恩に浴して居る事を言つたのである。季吟の脇——発句の次の七の句を脇といふ——は音を鳴くとなき跡とを言掛け、貞徳の死を悲しむ意を言ひ現して居る。なほ季吟は蟬吟の師匠として、

特に脇の一句を附けただけで、この俳諧の一座には加はらなかつた。

に始まる百韻一卷で、一座に列した連衆（俳諧を一緒に催す人々の事）は蟬吟以下五人の人々であつた。その中に宗房が加はつて居た事は勿論で、百韻中宗房の附句は十八句を数へる。これが芭蕉の連句の作として伝はる最初のものである。この百韻は貞徳のお墓のある鳥羽（京都の南）の実相寺に納められた。その奉納のお使もきつと宗房が仰せつかつたにちがひない。かうして蟬吟と宗房との若い主従の間は、更に俳諧を通じて深く結ばれて行つたのであつた。思へば芭蕉が屢々「この一筋」と言つた俳諧の道に、彼を初めて導き入れる機縁を作つたものは、実に主君蟬吟とのかうした関係であつた。さうして芭蕉は遂にこの一筋の道を辿つて、あくまでも強く生き抜いたのである。けれども芭蕉がいつまでも貞門時代の低い俳諧に止まつて居たのなら、それは生き抜くといふ程の価値もなかつたであらう。恐らく芭蕉も宜い加減のところで見切をつけて、後は主君の取立て藤堂家の相当な家来としてをさまり、結局平凡な武士の一生を送る事になつたかもしれない。それも世俗的には幸福な事とも言へる。しかし人が後世に残るやうな立派な仕事をする場合、神様は決して世間的な幸福や順境をその人に与へないのである。逆境に屈せず撓まず、新しい一歩々々を切り拓いて行く所に仕事の尊さはある。芭蕉にとつても順調な生活が彼の俳諧を大成させたのではなかつた。

寛文六年四月二十五日、芭蕉の身にとつては最も悲しむべき不幸が起つた。それは主君蟬吟の死である。この日蟬吟は僅か二十五歳を一期として早世した。彼は前に述べた如く、藤堂新七郎家の大切な嗣子であつたから、一家一門の嘆きは言ふまでもなかつた。わけても幼少の頃から絶えずお側近く馴れ親しみ、深い誠実をもつて仕へて居た芭蕉の悲しみはどんなであつたらう。それから芭蕉にはたゞ味気な

い月日がつゞくだけであつた。悲しみの中に四十九日の忌も明けた。芭蕉は高野山報恩院へ蟬吟の位牌と日牌とを納める為に、父君の良精から高野山に使の役を命ぜられた。これも亡き良忠との深い間柄を思つたからであらう。芭蕉はまもなく役目を果して歸つたが、それから続いて藤堂家に仕へる気にはなれなかつた。嗣子の地位は良忠の弟良重に移つた。芭蕉がそのまゝ藤堂家に止まるとすれば、当然この良重に仕へねばならぬわけである。たとひ旧主の弟であるにしても、あれ程の愛寵を受け、またあれ程の純真な誠実さを捧げた良忠の死後、すぐに二君に仕へるといふ事は芭蕉には堪へられなかつた。それで芭蕉は父君良精に暇を願つた。しかしそれは中々聞き届けられなかつたらしい。良精も芭蕉のやうな忠実な家臣を、手離してしまふ事を惜しんだのであらう。さうなると愈々良重に仕へねばならなくなる。思ひ余つた芭蕉は、遂に非常手段に訴へる外はないと考へ、無断で郷里を亡命してしまつた。当時どの藩でも、かうした無断脱走に対しては厳しい制裁があつた。だから芭蕉にしてもよくよくの覚悟がなければ、かうして主家を脱れ出る事は出来なかつたであらう。

芭蕉の亡命については、実はなほいろいろの説があるのである。何しろさうした脱走といふ事が非常手段であり、又芭蕉が段々名高くなつて来ただけに、郷里ではその亡命の理由として、面白半分に小説めいた話などを附会したらしい。例へば芭蕉はある夜ひそかに、

雲と隔つ友かや雁の生きわかれ

といふ句を、隣家の城孫太夫といふ者の門前に書残して、そのまゝ何処かへ姿を隠してしまつたなどといふ説もある。しかしこの句は後に述べるやうに、芭蕉が江戸へ下る時の別れの句と思はれる。とにかく郷里に伝へられたいろ／＼の小説めいた話は、幾分の事実も加はつて居るかも知れないが、そのまゝ